大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

ベス神図像の象徴と役割の伝播：古代エジプトから中国まで

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 重信, あゆみ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004269

ベス神図像の象徴と役割の伝播
―古代エジプトから中国まで―

重　信　あゆみ

はじめに
１．ベス神に関する先行研究
２．ベス神とは
３．蛇
４．東西交渉の事例
おわりに
参考文献
図版目録
地図１～３

はじめに

エジプトの神であったベスは「ギリシア、ローマ、ヌビア、極東などに存在するグロテスクな容貌を持つ神々たちの起源[1]」として世界中に広がりをみせ、出産場面のレリーフに描かれた例からその役割を「女性と出産の保護神」だと大城氏は位置づけている。また、「睡眠中のひとを守る」ことも重要な役割と見なした。いずれにしても邪を避ける役割を担っている。そして、図１が示すように、日常の水運びを表現した少女の図像がベス神のアミュレットを身に付けていることから[2]、この神が当時のエジプトの庶民に浸透していたと思われる。大城氏は、ベス神の姿を示す遺物の出土例が地中海周辺の地域とも[3]、アルタイ山脈周辺にもあるという。筆者は「西王母の源流 ―ベスが与えた

1　大城道則「パルミラにおける古代エジプト文化の浸透」、『駒沢史学』63、2004年、１頁。
2　図の解説に「紐に通したベス神像のアミュレットを首からさげ」とある。（ニコラス・リーヴィス、クレイグ・バークレイ監修『古代エジプトの美展』、東京新聞、2008年、189頁。）
3　大城、４頁。

図像的影響―[4]」で、中国の神の西王母とベス神との図像的な類似点を指摘して、半人半獣の西王母とベス神との関係を推定した。しかし、それは可能性の指摘に留まったままであったので、本稿ではベス神の出土例と分布を関連させて東西交渉の一端をもう一度見直してみたい。

図１　ベス神のアミュレット
（新王国時代、テーベ出土）

１．ベス神に関する先行研究

大城氏はベス神を「パルミラにおける古代エジプト文化の浸透」の中で取り上げて、ギルガメッシュ叙事詩に登場するフンババがベス神と容貌が似ていることや、女性の出産の守護神という点で類似していることを示している。そして、その起源をアッシリアやバビロニアの神パズズに求めるとともに、他の起源説も述べる。ベス神はギリシアではゴルゴンに変化し、その変形は東方のアルタイ山脈周辺でも発見されているという[5]。ステファヌ・ロッシーニ氏とリュト・シュマン＝アンテルム氏はベスの役割を次のように述べる。

> 戦いの霊であり、太陽と王の守護者である。あらゆる神秘的な悪に対する守護者として、その像は日常生活の品々（ベッド、枕、香油入れなど）を飾っている。

4　重信あゆみ「西王母の源流 ―ベスが与えた図像的影響―」、『人文学論集』28、2010年、73頁～89頁。

5　John Bordman『The Diffusion of Classical Art in Antiquity』、Thames & Hudson 、1994年、146頁。

また、動物から人間を守り、ホルスの石柱（シップ）に描かれる。あふれるばかりの喜びの神なので、ハトホルと結びついて、音楽と踊りと酒酔いを庇護する。またミンと習合して、生殖能力を活発にする。最後にベセトとともに、出産を司り、新生児を守り、産室を保護する。後代には、その像が描かれた数えきれないほどの小像や護符が示している通り、汎神のベスは宇宙の守護者となる[6]。

「張目吐舌」「戴冠」「裸体」「豹を被る」といった姿形上の特徴は、守護神たるベスの僻邪の表現と考えられる。 ベス神は世界中に分布している可能性があるにも関わらず、筆者が知る限り、大城氏の説明以外に体系的な研究はない。そこで、大城氏の研究を基盤としてさらに推論を進めていく。

2．ベス神とは

エジプト文化におけるベス神の姿形の特徴を検討する。図２は、現在発見されているベス神の中で最古の例のひとつである。図２は古代エジプトの中王国時代（前2055年～前1650年）に属している。アミュレットの一種たるマジカル・ナイフに描かれていて、姿は細く、人のように膝を曲げて、両手に足に絡みつく蛇のようなものを持つ。この神は裸で尾状のものをもち、垂髪の頭は布を巻き、口を開き、舌を出し、眼を見開く。垂髪、裸体、張目吐舌、蹲踞は後世にまで受け継がれる特徴であるが、痩身、布状物の頭飾りは後世に変化している。中王国時代のものとされ、図３もまたマジカル・ナイフであってベス図像の初期のものであろう。裸体、細い手足、丸い腹部で両手に蛇らしきものを持ち、髪を垂らし猫のような耳をもち、眼を見張り、口は開く。持つ蛇、裸体、半獣、張目開口、蹲踞が初期のベスの特徴である。とく蛇を両手で持っている姿が図２、図３に共通する。その蛇は後世のベスにおいてハープのような楽器、剣など変化するが、マジカル・ナイフでは両手の蛇が固定化している。つまり蛇は中王国時代におけるベスの役割を示すと思われる。

大城氏はマジカル・ナイフをアミュレットの一部と述べ[7]、また、ブルックリン博物館収蔵で解説に「古代エジプトのマジカル・ナイフは、悪霊や病気を追い払うために出

6　ステファヌ・ロッシーニ／リュト・シュマン＝アンテルム著、矢島文夫／吉田春美訳『エジプトの神々事典』、河出書房新社、2007年、50頁。

7　大城、６頁。

産時に妊婦のおなかと新生児の上に置いた。墓では、個人を守るためのものであった[8]。」とあるように、妊婦やこどもを守るための道具である。つまり、その役割を示す神が描かれていたと考えられる。

図２　マジカルナイフ
（中王国時代　前2055－1650）

図３　マジカルナイフ（中王国時代）

次に、新王国時代（BC1550年～BC1069年）のベス神についてみていく。図４は、小太りの図像である。頭には、上へと伸びた冠を載せている。唇が太く舌を出している。眉が太く、眼は見開いている。カールのかかったヒゲが顎にあり、足と比較すると、手は長く、バランスはよいとはいえない。首からペンダントを垂らしている。手には、何も持っていない。

図４　羽毛の冠を被るベス神（新王国時代）

図５　ベス神（末期王国時代）

8　Ancient Egyptians placed knives like this one on the stomachs of pregnant women during childbirth and on newborns to repel demons and disease. In the tomb, such knives provided protection for the deceased（https://www.brooklynmuseum.org/opencollection/objects/3185、拙訳。）

また、図５のベス神像は、顔の輪郭部分に短い髭を蓄えている。また、髪の毛は、ザンバラである。閉じた口より舌はでている。頬骨のようなものが浮き出ている。そして、耳は人間の耳がある位置より高く、獣のような顔つきである。これは、中王国時代のベス神の姿を受け継いでいるように見える。ここでも、「張目吐舌」という特徴がみられる。つまりはベス神が展開するなかでも、変わらない部分であり、この特徴をプロトタイプとして展開していく。その後、ギリシアではゴルゴンに変化をする。（図６）ここで注目すべきは、手に持っていた蛇は表現されなくなることである。しかし、蛇は、エジプトでは、畏怖すべき対象である。その蛇を持っていることでベスは特別視されていたのであろう。では、蛇は、どのようなことを象徴しているのか。

図６　ゴルゴン

３．蛇

ベスは中王国時代のものでは、蛇を両手に持っていた。しかし、新王国時代には、片手で蛇をもつ図像は存在するが、両手で持った蛇を足に絡める姿姿は消失する。では、蛇は何を象徴しているのか。

まずは、世界中に残る神話の数々で蛇が何を表わしているのかを整理する。このことに関して、近藤良樹氏は、蛇は、「人知を超えた知恵の持ち主」（畏怖の対象）、「永遠の生の持ち主」（蛇が生命をつかさどり再生して永遠の生を保つ）、「執着の象徴となるへび」、「男性・女性の象徴」と指摘する[9]。エジプトにおける蛇は、危険から身を守って

9　近藤良樹「昔話・神話にみる蛇の役柄 ―知恵・生命・異性の象徴となる蛇―」、西日本応用倫理学研究会、『HABITUS』16、2012年、１～25頁。

くれるものである。それは、人のみならず太陽をも守る。（図７）そして、とくにコブラは王の権威の象徴でもあった。ワジェト女神はコブラの姿をし、下エジプトの守護神である。さらに、女王の王冠にはコブラの装飾がほどこされている[10]。

図７　太陽に巻きつくコブラ

一方で、蛇は悪の象徴でもある。それは、『死者の書』に表わされるアポピに代表される。アポピは死者が冥界（オシリス）の世界へ行くのを妨げる。それを猫の姿をした太陽神が切りつけている場面がある。

では、ベスはなぜ両手に蛇を掲げるのか。それは、蛇が生命の象徴でもあるからであろう。そのことは、マジカル・ナイフが出産時に妊婦を守護するために使用されることからも推測される。つまり、死という禍をベスにより取り除くことを表わしていると同時に、蛇による生命の再生をも表していたのではないか。

クレタ島クノッソス出土の女性立像もまた両手に蛇を掲げていて、（図８）「蛇女神」と呼ばれる[11]。小島瓔礼氏は「蛇女神」が「女神というよりも女性神官であり、蛇に関連する何らかの祭儀を表わしているにちがいない[12]」と述べている。しかし、どのような祭儀かは関連文書がないので断定できないとする。その蛇は「家の守護天使、精霊として尊崇され養われていた家つきの蛇」というR･W･ハッティソンの説に同意している。さらに、ギリシア神話に登場するヘルメスの杖にまとわりつく二匹の蛇についても言及した。二匹の蛇は呪術・占術を含む知的活動とも関係していて、「知」との関係は近藤

10　エジプトにおける蛇と王権については、大城氏が「古代エジプト王権の象徴としてのヘビについて ―ジェベル・タリフ・ナイフハンドルと自然崇拝―」（『駒沢史学』84、2015年、34～53頁）の中で、詳しく述べているので、そちらを参照されたい。

11　小島瓔礼『蛇の宇宙誌 ―蛇をめぐる民俗自然誌』、東京美術、1991年、228頁。

12　同、228頁。

氏によっても述べられている[13]。そして、医神アスクレピオスも蛇が絡む杖を持つように、蛇は生命を復活させる役割を担っていたのである。このように、蛇は、神話の中で、僻邪であると同時に、生命を復活させる役割を担っていたと考えられる。

図８　クノッソスの蛇女神

ところで、中国の前漢初期に属する馬王堆漢墓３号墓帛画に描かれる力士は、龍の尾を両手に抱えているかのように見えて、（図９）その龍は上へと上昇している。そして、マジカル・ナイフに描かれる蛇もまた上を向いている。掲げているものが龍と蛇との違いはあるが、上昇する蛇や龍を両腕に掲げる構図は類似している。さらに、人物が龍を両手に掲げる遺物がシバルガン遺宝の中にある。（図10）解説には「王と竜」と題され、「中央の王が２匹の龍を取り押さえているモチーフ」とある[14]。中央の人物を中心とし、両側に龍を配置するという構図は、ベスを中心として両手に蛇を持つというマジカル・ナイフのものと類似している。エジプトのベスと蛇、クノッソスの蛇女神と蛇、シバルガン遺宝の王と龍、さらには、中国の力士と龍は、人物を中心として、両側に蛇あるいは、龍を配置するという構図となっている。

13　近藤、２頁。

14　長澤和俊編集『中央アジア･東西文明の十字路（NHK 大英博物館）』、日本放送出版会、1991年、19頁。

図９　馬王堆三号墓　力士（前漢）

図10　王と竜

さらに、蛇が上述したような再生や生命を象徴しているとすれば、ベス、蛇女神、王そして、力士が再生と関わりがあると言えよう。つまり、構図の類似性より、エジプトのベス神、クノッソスの蛇女神、シバルガン遺宝の王、中国の力士は影響関係が存在したことが推測できよう。また、東西交渉がなされていたことは、最近の発掘調査より明らかになりつつある。

４．東西交渉の事例

東西交渉の事例については、山田俊輔氏が「角杯に見るユーラシアの東西交渉」において角杯の西方からの伝播ともに、紀元前２世紀に海上ルートで東西交渉がされていたこと、草原ルートが前２世紀～前１世紀頃に開通したと述べた。一方、江上波夫氏はスキタイ系文化が前６世紀～前２世紀の間に「草原の道」を通って西から東へ伝わったとして[15]、古い時期からの東西交渉説を提唱している。さらに、イランのサキザバードから出土した彩文土器と中国の甘粛・青海省出土の彩文土器（特に、馬廠期と辛店期）との類似点を指摘して、サキザバード遺丘の年代を前2200年ないし前1500年頃と推定した。この年代は甘粛・青海地方の馬廠期と辛店期の年代と大差がない[16]、として両者の彩文土器の比較から「製作について、輪積（わずみ）や手づくねによる成形と、低温の焼成が、両者に斉しく認められ[17]」、「彩文の図文と色彩における顕著な類似ないし対応が認めら

15　江上波夫『東西交渉史話』、平凡社、1985年、12頁。
16　江上波夫『遊牧文化と東西交渉史』、山川出版社、2000年、101頁。
17　江上、『遊牧文化と東西交渉史』、94頁。

れる[18]」という類似点をあげる。しかし、一方で、「イランと中国西北部の甘粛・青海には大きな地理的距離があって、後の時代の「絹の道」による東西文化交渉の「孔道」（ママ）にあたるが、前2200年ないし前1500年の昔に同様の「彩文土器の路」がそこに開かれていたことを示す考古学的調査の結果がほとんどない[19]」とも述べている。石田恵子氏は中国、戦国時代の玉（たま）とヨーロッパのケルトの玉はともに多色モザイクガラスのビーズであることを指摘している。これもまた、東西交渉の一例といえるであろう。石田氏によると、「目玉文様のガラス玉はエジプトで紀元前15世紀頃から作られて」、イランでは「紀元前1000年以降に出土例」があり[20]、とガラス玉は世界中で発見されている。さらに、アルタイ地方のパジリク古墳群では、紀元前７世紀～紀元前２世紀ごろのクルガン出土の副葬品として「西アジア産の毛織物、中国産の絹織物等[21]」が出土している。さらに、北インド地方生産の女性用のシャツも発見されている。つまり、当時、西アジア、中央アジア、北インド、中国が交易によって行き来があったことが推定される。夏時代の二里崗遺跡でトルコ石の象嵌されたものが発見されている。（図11）秦小麗氏は「トルコ石装飾品は中国での出現が最も早く、およそBC7000年の裴李岡文化期には、すでに装飾に用いられ[22]」と述べ、さらに、トルコ石の象嵌の最も早い例もまた中国であるとしている。しかし、トルコ石の装飾品は世界中で発見されている。それらの相関関係については、現在のところ不明ではあるが、川又正智氏がラピスラズリの交易網を述べるなかで、「ラピスラズリの他に紅玉髄・トルコ石・容器をつくる凍石などの石も西アジア一帯を運ばれたものである[23]」と、トルコ石もまた交易により各地に運ばれていたことを述べている。氏はラピスラズリとトルコ石がともに青系統の色をしていることを指摘し、どちらも社会的宝物であったと述べる。ラピスラズリもトルコ石も産地が限定されている。つまり、世界の各地域でラピスラズリやトルコ石を使用した宝飾品が発見されていることを鑑みると、石の交易網が発達していたと考えられる。また、二里崗遺跡からは、宝貝も発見されている。川又氏によると、宝貝は「インド洋～東南アジア～四国九州以南で採れる海貝[24]」である。そして、宝貝もまたトルコ石と同様に当時珍

18　同上。
19　江上、『遊牧文化と東西交渉史』、101～102頁。
20　石田恵子『古代ペルシアの装身具』、（財）古代オリエント博、1996年、６頁。
21　福岡博物館・西日本新聞社編集『アルタイの至宝展』、西日本新聞社、2005年、73頁。
22　秦小麗「黄河流域におけるトルコ石製品の生産と流通」、『金沢大学文化資源学研究』19、2018年、44頁。
23　川又正智『漢代以前のシルクロード ―運ばれた馬とラピスラズリ―』、雄山閣、2006年、48頁。
24　川又、42頁。

重されたものである。このことからも、陸上、海上ともに中国から中央アジア、そして、西アジア一帯の各都市を結ぶ交易ルートが確立されていたことがわかる[25]。

図11　トルコ象嵌　二里遺跡

上述したように、交易により東西交渉は推し進められていったと考えられる。メソポタミアのウルクを中心とした交易は中央アジアまで及び、堀晄氏によると、「イランでは紀元前4500年頃には鉱石を精錬し、銅の斧や鑿などの工具を鋳造していて、その豊富な資源を、銅の工具はまだなかった大人口のメソポタミアに輸出する交易拠点都市が成長し、トルクミニスタン、ウズベキスタン、アフガニスタン、パキスタンの一部を通じるラピスラズリや金、銀の交易網が築かれた[26]」という。その交易網を実際に築いたのは商人たちであったであろう。その商人たちの移動とともに思想や信仰もまた移動したと考えられる。その中にベス神も含まれていた。その証拠にベス神はアルタイ山脈近くオクサス遺宝にも含まれている[27]。ベスの「張目吐舌」や「戴冠」いった要素は変化することなく各地で受け入れられた。ベス神の広がりを地図１～３に示した。西はチュニジア、北はギリシア、東は、アフガニスタンに広がり、その姿は全身から頭部のみへと変化する。また、マジカル・ナイフでは両手に蛇を掲げていたものが、刀のようなもの

25　川又氏は、「初期金属器時代の変化としてメソポタミアのウルクや黄河流域の鄭州二里崗が大勢力化することをとりあげて、ウルクエキスパッション・二里崗インパクトなどと呼ばれる用語がつくられて議論されている。これは金属器時代に入った初期に勢力を持ち、大規模な資源探索部隊を遠征させた状況を代表する都市である。これらの都市こそが、金属のみならずラピスラズリや玉をもとめて遠距離交易を促進したのである。」と、当時、遠距離交易がおこなわれていた状況について述べている。（川又、43頁。）

26　『古代バクトリア遺宝』、MIHO MUSEUM、2002年、10頁、堀晄「中央アジアの考古学」。

を振り回す片手に変わり（図５）、悪霊を追い払う。スーサ出土土ベス神図像は頭に冠を戴き、口を開け、舌を出し、髪を垂らす。オクサス遺宝の図12のベスも同様の形状で、両者共通は、頭部のみである。それは張目吐舌を強調することで、僻邪としてのベスの役割が伝わったことを示すのであろう。

図12　ベス神（オクサス遺宝）

おわりに

「張目吐舌」をプロトタイプとする図像は、エジプト、ギリシア、中央アジアから、中国にまで広がった。ベス神の最古の図像たるエジプトの中王国時代の図像は、「張目吐舌」だけでなく両手に抱えた蛇の特徴であった。大形氏が述べた[28]僻邪の象徴たる「張目吐舌」は、ベスにも当てはまるだろうが、ベスの蛇は悪霊排除以外にも再生の象徴でもあったように推定できる。なぜなら出産時に使用されるマジカル・ナイフに描かれるからであり、出産時に妊婦や嬰児に死の禍が訪れるとベス神がその悪霊を払い、蛇に再生させる役割を与えたとも推測できるからである。ベス信仰がその後中央アジアにまで広がるのも、交易中継地点スーサにおけるベスのアミュレット（図13）発見から推測で

27　オクサス遺宝は、1877年ごろ、オクサス川、すなわち、いまのアム・ダリア上流の、アフガニスタンのクンドス町付近で、現地住民によって発見されたとされている。（岩村忍『文明の十字路＝中央アジアの歴史』、講談社、2007年、60頁。）また、それらは、黄金であり、身分の高いものの遺物であることは予想がつく。つまり、この時代の東西交渉は黄金製品など奢侈品交易が主で、専ら支配者層のためのものだったと言える。また、それら黄金の遺物の大半は、アケメネス時代（紀元前５世紀～紀元前４世紀）に属するものが大半である。（61頁）また、「オクサス遺宝は、このように西南アジア的・イラン的要素をふくむものではあるが、ギリシア・バクトリア的、またはヘレニズムの影響をうけたものは、いくつかを除いてはむしろ少数である。」（61頁）と紀元前５世紀～紀元前４世紀ごろの東西交渉を示す貴重な資料である。

28　大形徹『中国古代の霊魂観 魂のありか』、角川選書、2000年、250頁。

きるように、僻邪としてのアミュレット使用が商人たちの旅路の無事を願ったためだと思われる。スーサやオクサスでベスが頭部のみで表現されたのは、僻邪の「張目吐舌」部分のみが重視されたためだろう。一方、再生表象の蛇も図像としてシバルガン遺宝や馬王堆帛画に伝わり残されたと推定される。ベスは各地域に伝播する際に地域に応じて変化したが、その精神性は僻邪や再生観念を基盤にしていただろう。

以上のように、ベスは場所によって神としての名を変えながら、その姿や持ち物によって僻邪の象徴性や再生観念を世界中に伝播させる担い手だったとも言えるのである。

図13　ベス神（紀元前４世紀ごろ、スーサ出土）

参考文献

- 大城道則「パルミラにおける古代エジプト文化の浸透」、『駒沢史学』63、2004年。
- 大城道則「古代エジプト王権の象徴としてのヘビについて ―ジェベル・タリフ・ナイフハンドルと自然崇拝―」、『駒沢史学』84、2015年、34～53頁
- 岩村忍『文明の十字路＝中央アジアの歴史』、講談社、2007年。
- 大形徹『中国古代の霊魂観 魂のありか』、角川選書、2000年。
- 川又正智『漢代以前のシルクロード ―運ばれた馬とラピスラズリ―』、雄山閣、2006年。
- 小島瓔礼『蛇の宇宙誌 ―蛇をめぐる民俗自然誌』、東京美術、1991年、228頁。
- 近藤良樹「昔話・神話にみる蛇の役柄 ―知恵・生命・異性の象徴となる蛇―」、西日本応用倫理学研究会、『HABITUS』16、2012年、１～25頁。
- クリスチアヌ・デローシュ＝ノブルクール著・小宮正弘訳『エジプト神話の図像学』、河出書房、2001年。
- 重信あゆみ「西王母の源流 ―ベスが与えた図像的影響―」、『人文学論集』28、2010年。

- 秦小麗「黄河流域におけるトルコ石製品の生産と流通」、『金沢大学文化資源学研究』19、2018年。
- 杉山二郎『世界の大遺跡７ シルクロードの残映』、講談社、1988年。
- ステファヌ・ロッシーニ／リュト・シュマン＝アンテルム著、矢島文夫／吉田春美訳『エジプトの神々事典』、河出書房新社、2007年。
- 長澤和俊編集『中央アジア・東西文明の十字路（NHK 大英博物館）』、日本放送出版会、1991年。
- 三笠宮崇仁『古代エジプトの神々 ―その誕生と発展』、日本放送出版協会、1987年。
- 李松『論漢代芸術中的西王母図像』、湖南教育出版社、2000年。
- John Bordman『The Diffusion of Classical Art in Antiquity』、Thames & Hudson、1996年。
- A. J. スペンサー編、近藤二郎監訳『大英博物館 図説古代エジプト史』、原書房、2009年。
- MIHO MUSEUM『古代バクトリア遺宝』、MIHO MUSEUM、2002年、10頁。
- 吉村作治『カイロ博物館 古代エジプトの秘宝』、ニュートンプレス、2000年。
- 大阪府立弥生博物館『発見！ 古代エジプト』、2018年。
- 吉村作治監修『ナイルが伝える悠久の遺産 黄金のエジプト王朝展 ―国立カイロ博物館所蔵―』、ファラオ コミッティ、1991年。
- 東京国立博物館・京都国立博物館・ベルリン国立博物館『大エジプト展』、日本テレビ放送、1988年。
- ニコラス・リーヴィス、クレイグ・バークレイ監修『古代エジプトの美展』、東京新聞、2008年。
- 東京国立博物館『世界四大文明 エジプト文明展』、NHK、2000年。
- 近藤二郎・馬場悠男『大英博物館 ミイラと古代エジプト展』、朝日新聞社、2007年。
- https://www.brooklynmuseum.org/opencollection/objects/3185（2019年１月10日検索）
- https://www.louvre.fr/jp（2019年１月10日検索）

図版目録

図１　壺を運ぶ召使いの少女、ニコラス・リーヴィス、クレイグ・バークレイ監修『古代エジプトの美展』、東京新聞、2008年、261、189頁

図２　マジカル・ナイフ、大城道則「パルミラにおける古代エジプト文化の浸透」、『駒沢史学』63、2004年、17頁、図３。

図３　マジカル・ナイフ、https://www.brooklynmuseum.org/opencollection/objects/3185（2019年１月10日検索）

図４　羽毛の冠を被るベス神、https://www.louvre.fr/jp（2019年１月10日検索）

図５　ベス神、https://www.louvre.fr/jp（2019年１月10日検索）

図６　ゴルゴン、https://www.louvre.fr/jp（2019年１月10日検索）

図７　太陽に巻きつくコブラ、吉村作治『カイロ博物館　古代エジプトの秘宝』、ニュートンプレス、2000年、148頁。

図８　クノッソスの蛇女神、小島瓔礼『蛇の宇宙誌 ―蛇をめぐる民俗自然誌』、東京美術、1991年、228頁。

図９　馬王堆三号墓　力士、曾布川寛『中国美術の図像と様式』図版編、2006年、30頁。

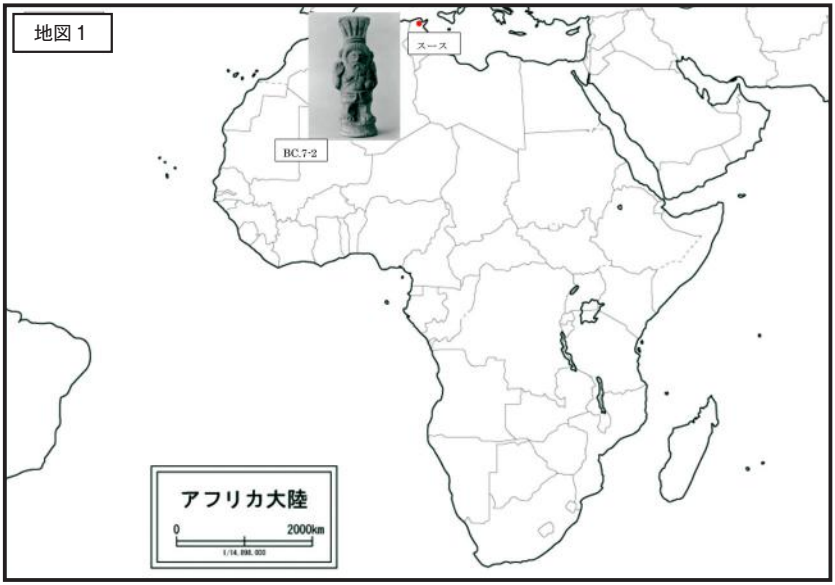
図10　王と竜、杉山二郎『世界の大遺跡７　シルクロードの残映』、講談社、1988年、154頁。

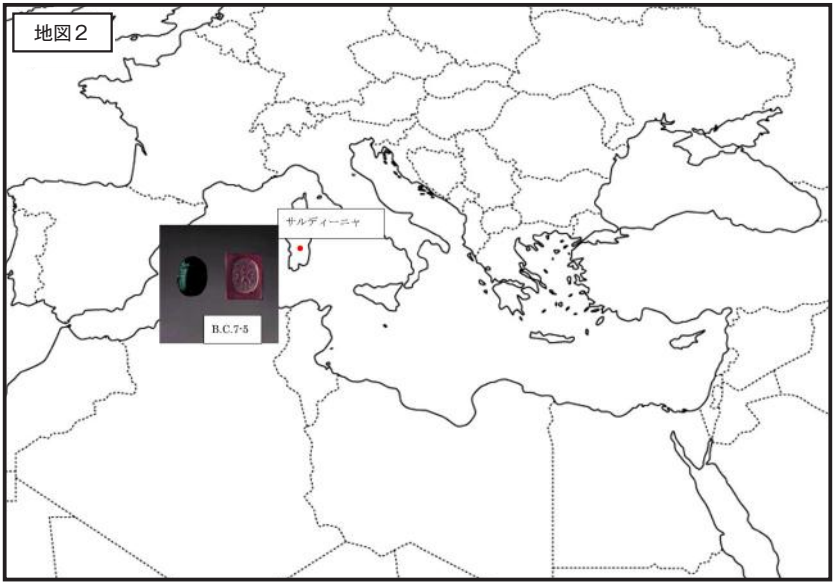
図11　トルコ象嵌、東京国立博物館・読売新聞社『誕生！中国文明』読売新聞社、2010年、26頁、１。

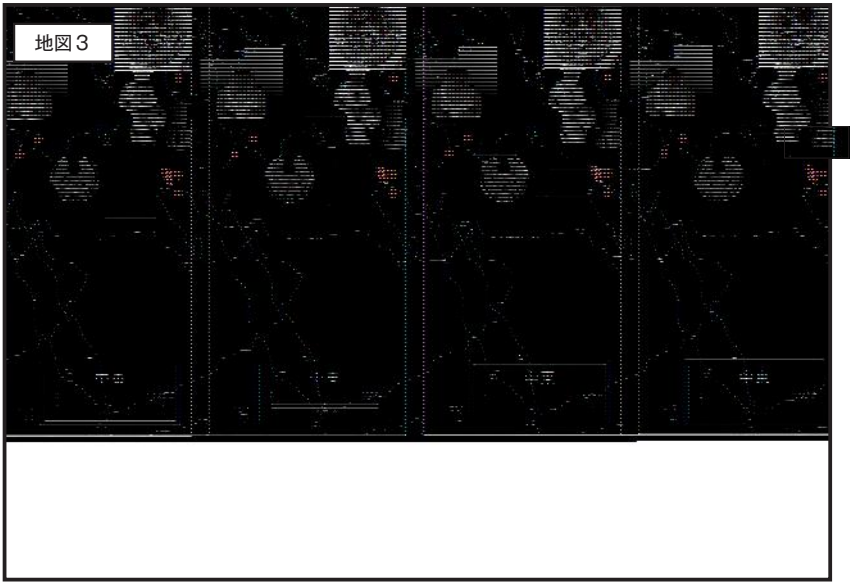
図12　ベス神　オクサス遺宝、長澤和俊編集『中央アジア・東西文明の十字路（NHK大英博物館）』、日本放送出版会、1991年、49頁。

図13　ベス神、https://www.louvre.fr/jp（2019年１月10日検索）

地図１～３に配置したベス神神図像は、https://www.louvre.fr/jp（(2019年１月10日検索）に記載されているものである。




地図２
サルディーニャ
B.C.7-5


地図３